Title	布哇：島嶼社会の社会生態的研究
Sub Title	
Author	奥井, 復太郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1939
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.33, No.2 (1939. 2) ,p.269(123)- 287(141)
JaLC DOI	10.14991/001.19390201-0123
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19390201-0123

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『布哇—島嶼社會の社會生態的研究』

奥井復太郎

本書は原名を *An Island Community* と云ひ副題に *Ecological Succession in Hawaii* とある。著者は Andrew W. Lind 布哇大學の社會學教授であり、本書はシカゴ大學で R. E. パーク教授指導下にあつてドルトル論文としての研究の成果である。此の關係でパーク教授が緒言を寄せてゐる。

扱、本書の研究目標は其の書名及び副題並びに著者の學歴の示す様に布哇と云ふ島嶼社會の社會生態的研究、殊に布哇と云ふ島に行はれる人間社會の生態的エコロジカルサクセッション連續の經過を社會學的に明かにしようとするにある。元來、生態學とは植物學上の觀念であつて、植物（一般には生物）の生存を中心として、土地、殊に一定の地域と其の上に生長する植物（又は生物）の群生關係を靜態動態の兩方面について取扱ふ學問である。此の關係が人間社會の場合に於いても見られるのは當然である。又生態學的研究の重心は動態的方面に置かれる。靜態的には所謂均衡の状態が問題になるが、土地、社會及び周圍、此の三者の凡て又はいづれかの變化によつて、此の均衡が破れて新しい均衡への動きが生ずる。之れが變化であるが、此の變化も、以上三者の新たな均衡への動きに外ならぬ。此の三者の内最も可變的なのは社會である。蓋し社會の素材である生物又は人間は生長發展の生物的過程にあるものであるから、

従つて是等三者の關係を一括して社會的關係たるものが發生し、茲に制度と組織が具體化する。が、是等は併せて變化の過程の内に推し進められる事も當然である。

生態學は主として、幾分狭い空間、地域を其の觀察の對象とする。茲に布哇の如き島嶼が觀察の對象となるのも當然である。(布哇の諸島の合計面積は六、四三五平方哩)殊に之れが面積にして最大四、〇三〇平方哩最小四、五平方哩の八つの島嶼から成る事を思ふと、空間的な規定は頗る限られてゐると云ふ事が出来る。太平洋中の一群島ではあるから是等島嶼の關係が一體化してゐる事は當然であるが(即ちホノルルが此の全地域の中心地)、それにしてしも六、四三五平方哩の土地が一割地であるのと、かくの如く海を隔て、分立してゐるのでは可なり、全社會的に見て相違を生ずるであらう。之れ又、生態學的な興味の対象となり得る。唯、本書は布哇群島を一體として論ずる方に重心が置かれ、此の各個島嶼の分立的構成(つまり其の獨自的相違性)については必ずしも強調されてゐない。勿論、各島嶼の特色なり異色なりが全然示されてゐない譯ではなし。常に Hawaii, Maui, Oahu, Kauai, Molokai, Lanai, Nihoa, Kahoolawe の八島に就いて個別的具體的記述がある。例へば土地の利用・耕作に就いて(第四章)人口構成に就いて(第六章)或ひは商業化・都市化(第七章)に於いてはその個別的記述を見出す。しかし、全體的に見て、研究の態度は既に述べた様に、一體の取扱ひを基調としてゐる。換言すれば、資本主義的世界經濟下にある成熟植民地としての布哇の、生態現象を取り上げて論ずるのが主題である。

二

扱、生態現象に於ける要因が、土地と社會と周圍との三點にあり乍ら、基底は土地であるが故に、先づ土地の地質地理的記述を以つて發足するのが當然である。第一章「布哇・其の地位の變化」は、布哇の太平洋中に於ける距離

的位置を以つて書きはじめるが、先づ土地構成が説明され、更に生物及び人間の侵入に論及する順序になつてゐる。そして、茲に先づ土民社會の成立がある。布哇が文明的關係を持ち出して來るのは之れから後で「太平洋を廻ぐるより大なる世界と關係する様になつて、根本的な影響を受けたと云ふ意味で此の群島の發見されたのは一七七八年キャプテン・クックの航海以前ではない」(七頁)従つて之れ以後の布哇には第三の要因、即ち周圍、又はより大なる世界との關係が大きな影響を持つて來る事となつた。換言すれば、其の時以後の布哇は、大きな世界・世界經濟の機構内にある位置を占める事となり、従つて、其の全體とその位置に就いてのみ、布哇を理解する事が出来る譯となつた。第一章の『地位の變化』は此の間の事情及び推移を簡単に説明してゐる。第二章以後は第一章に發展史的に取扱はれたものを、各個の分子に就いて個別的に論及するのである。例へば第二章に於いては、「土人」の問題、土人經濟内に於ける「土地」の問題等が説明される。其の概括的記述は土民的自給經濟と云ふ言葉で盡きる。

しかし歐羅巴との接觸を持てば、當然此の土民經濟の體制が破れる。殊に布哇が先進資本主義國の農業植民地ともなれば、先づ第一に土地問題が起らねばならぬ。之れが第三章の「土地讓渡」即ち外人土地所有の問題であつて、之れが當然土民經濟内に於ける土地制度にも影響を與へる事となる。未開地又は農業地にあつては土地關係が凡べてを規定する全部だと云つて差支あるまい。「布哇の歴史は其の土地の中に書かれてゐる。過去百五十年間に土地の使用及び支配に就いて生じた變化を適正に記述すれば住民の生活や活動を明かにする許りでなく、彼等が建設した諸制度の、彼等の生活する社會の型をも明かにするであらう。土地使用の變化は經濟關係に於ける世界網中に於ける布哇の占める位置の移動を計るには少し抽象的な尺度ではあらうが、此の土地保有關係の推移しつゝある基石の上にこそ、布哇の政治的精神的秩序が建てられてゐるのである」(五七—五八頁)。

かかる過程に於いて土地は舊來の利用法から全然、新規な用法へと推移する。一農法に於いて示された耕作又は利用序列は全く趣を改める。第四章は此の推移を物語る(第四章『土地の新たな利用』) 此の利用は、商業的農産物の耕作に現はれる。甘蔗栽培は其の大宗であるが、嘗ては珈琲栽培が囑望された事もあり、或ひは煙草、棉花等の栽培農業も着手せられた事がある。又、パインナップル栽培は、近來に於いて頼みに勢力を増大したと云はれてゐる。しかし甘蔗栽培が、栽培植民地としての布哇の産業的活動の眼目である事は動かすべくもない。唯、近來、再び栽培農業から多邊的自給農業への推移がある事を見逃してはならぬ。茲に布哇の經濟的成熟を示す一環があるが『野菜、果實、搾乳製酪の多邊的な直接消耗作物を、殊にホルルの附近に於いて耕作すると云ふ方向への推移は土地使用の一循環の完成、即ち土民的生活作物から各種の植民地的商品へ、更に再び地方的生活作物への循環の完成を示すものである。商業作物の限界耕地を、年々輸入される野菜、果實、製酪、家禽作物の、五百萬弗、少くとも其の一部分の耕作に轉ずる可能性が、今日では布哇に於ける各機關の周到なる注意を牽きつゝある』(八三頁)

三

茲で問題は人間の問題に移る。第五章の『生物學的競争と殘生者』及び第六章の『布哇人口の恒定』がそれで布哇の人的構成を取扱ふ。再び茲でも布哇の人口的循環を問題にする。(一)土民人口の恒定期——諸島の自然資源と土俗文化との適合期、(二)外國植民初期の土民人口の急激なる衰亡(一七八〇—一八六〇)、(三)不安定なる均衡時代(一八六〇—一八八〇)人口趨勢の不確實なる期、(四)外國種の急激なる膨大期、之に伴つて土民人口の減少の緩和及び混血人口の加速度的膨脹、(五)各種人口中に於ける競争、協和を新しい基底として成立した漸次的再恒定期(一九三〇年以降)の五期が筆者によつてあげられた一循環期である(八八頁)。此の規定の内に著者は、經濟的變化に照應

する土民人口と外國移民人口との、それらの情勢を論ずる。土民は勿論、外國移民にあつても、人種國籍別や、移住年限の長短が人口情勢に及ぼす影響はこゝで論ぜられてゐる。第五・第六の兩章は此の關係からして、外國移民に依存する植民地社會の問題に就いて、先づ最も重要視されねばならぬ根本的問題であらう。『一九三〇年布哇人口の七分の六は直接の移民であるか又は此の群島への非布哇人的移民の子孫かである。キャプテン・クックの發見以來、殆ど現在に到るまで、世界各地より布哇への移民は益々増大し乍ら繼續して來た。他の世界各地と關聯した布哇の地位に何か動搖が起ると、之れが直に此の群島の人口水準に、移民運動の量及び性質に記録される事となる』(一〇三頁)一八五三年布哇在住の『外國人』は二、一九九人であるが、内、二〇二名の土地出生を除いて、一、九一七人に就いては世界各地から集つて來てゐる。主な數字では、合衆國(六九二)大英帝國(四〇三)に次いで支那(三六四)があり、他は獨逸・白耳義・和蘭(合計八一)佛蘭西(六一)が主なものである。日本は此の時代には未だ記録されてゐない。『布哇の世界的接觸の第二期、殊に一八七六年以降の外國移民の大量は、栽培農場の發展によつて生じた勞働需要に基くものである。此の理由によつて、此の移民の人的性質は幾分狭く制限される事になつた。大洋洲諸島のあるもの、支那・日本・朝鮮・フィリッピン・ポートトリコ・歐羅巴の一部の國、殊に葡萄牙及び西班牙等の農民人口が布哇の膨脹人口に對してそれらの分前を持つてゐる』(一〇六頁)。亞米利加及び北歐の優勢は對外接觸のはじめの百年間は重大な脅威を受けなかつたが一八七六年の互惠條約によつて、經濟的發展への障害が除れるや、支那人が先づハオレ(白人)を凌駕し、それ以來、「他の白人」は移民人口中にあつて數量的に擡頭する事が出來なかつた。著者は、人種、國籍別に、常に次の八種を擧げてゐる。即ちフィリッピン人・朝鮮人・日本人・支那人・ポートトリコ人・西班牙人・葡萄牙人・「他の白人」がそれである。全白人種の數量は、過去二十年間に全島人口の約五分

の一を動かさない。日本人の絶對優勢は、この三十年間不動である。(二〇七頁)

此の種類の構成は更に出生・死亡等に關し、年齢構成に關して各々人種的特徴を示す場合があるかも知れない。しかし此の場合著者は頗る慎重な態度を示してゐる。「一度、移民の門が閉ざされると、此の地域内に於ける生命闘争に於いて各人口集團の成功或ひは失敗は、その死亡に對する出生の率に反映して来る。そして特殊の主張、人種理論の代辯者達は、やゝともすると此の統計を自己の好みに従つて利用又は悪用し勝ちである」(一〇七頁)。即ち「本性的に多産な人種」と云へば直ぐ日本人となり、其の反對に最も低率の人種はハワイ土人と云ふ事になる。しかし著者は素朴の出生・死亡率計算法による事を最も危険としてゐる。誠に、植民地の様に年齢及び男女構成が決して正規でない土地に於いては單純な計算法の不當なるは云ふ迄もない。「ある人種集團に千人に對し八・五と云ふ低い死亡率があるとすると、しかし此の人口集團では四四%が二〇—三〇歳の健康・壯年期の人口であるとすれば、低率によ其の死亡率は確かに重大な保健問題をひそめてゐる。同じ様に、千人に對し二一と云ふ低出生率も、既婚婦人が居ないと云ふ事によつて修正を行へば、一番高い出生率となる」(一〇八頁)。植民地に於いての利害關係が人種的に錯綜せる場合、統計的取扱に此の細心さを示すのは、當然の事乍ら、著者の態度は高く買はれて差支ない。此の修正に基いて見ると一九三二年ではフィリッピン、ポートルコの移民及びハワイ人及び半ハワイ人の三種の母性について最高の出生率を示す。唯、是等はいづれも幼児死亡率が頗る大であるから、人口増加に實質的寄與する所は必ずしも大でない。「支那人・日本人及び朝鮮人は、此の點ではアメリカナイズして來て可なり確實な歩調をとつてゐる」(一一二頁)。

布哇經濟の成熟と共に(移民入國への門戸が閉ざされ、外資流入が抑制され、反對に土着勞働力の増加、移出民海

外投資が必要視されて來ると共に)人口構成も安定を得て來る。殊に興味あるのは年齢・男女性別構成に、移住年限の長短が作用してゐる事である。年齢構成のピラミッドにあつて、布哇人が最も正規型をとり、フィリッピン人が最も不規則型を示す。支那人及び日本人は漸次不規則型より正規型に近づきつゝある。(一二三頁に挿入の第十一圖参照、一九一〇、二〇、三〇年の三期について各移民の年齢性別構成が如何に正規型を離れてゐるかについては、一二五頁の表が之れを明瞭にしてゐる。)要するに此の點は、出稼的植民地から定着的生活への推移を示す重要な基礎で、布哇が「地縁社會」として、一つの全一體化するか否かを物語る證左となる。一二八頁挿入の人口ピラミッド表は、各移民人種について各地方別、即ちハワイ、マウイ、カウアイ、オアフ農業地、ホノルルの五地方に分けて其の構成を見たものであるが、地方的にはホノルルが最も正規型であり、オアフ農業地、カウアイ島等が不規則型になつてゐる。人種別を加へてみれば、最も不規則型をフィリッピン及び朝鮮人に見る。此の場合もホノルル以外の栽培地が殊に甚しい。正規型の代表はハワイ人の場合である。

四

此の變化又は人口構成の恒定化に對應する經濟的現象は、布哇經濟中に占める商業的勢力の増大と云へるであらう。(第七章「商業の侵入」)布哇と西歐人との正規的接觸は、太平洋航海者の薪炭・飲料水・食物等の補給より進んで、土地産物の交易にはじまる。布哇土人が交易の對象として鐵、鐵製品を好んだとか、交易に際して頗る寛大であつたとか、彼等の初期の交易は、經濟的取引と云ふよりは、好意の表示であり、贈物であつたとか、更に西歐人との接觸によつて漸次商業的精神を修練して行つて頗る抜目がなかつたと云ふが如き記述は、商業史的な興味の問題である。

然かし地誌的研究にとつて重點となるのは、商業にしても之れが土地に定居した場合である。布哇に亞米利加商人の定住をみたのは一八二六年頃と云はれる。ホノル、に此の商人定住を見るに至つた主な原因は布哇を太平洋の本部とする捕鯨業の需要が増大した爲めである。『捕鯨業者が土地の農産物を購入し、布哇船員を募集する事から土人に外國商品を購入する手段を興へた。又、船舶も船員も布哇の是等の店舗から捕鯨用品を求めた』(一四六頁)。

一八二六年のホノル、商館の投資高は六十八萬弗と云はれてゐる。此の事は、商品に對する需要の恒定的存在もさる事ながら、社會全體に安定と平和の或る程度まで確保せらるゝに至つた事を示してゐる。著者は、此の點に結びついて舊來の土着の政治的・道德的體制の漸次的崩壊を注意してゐる(一四七頁)。

『合衆國・英國・佛蘭西等からの外國軍艦が居る事は、よし實際に其の力を行使しなかつたにしても、少くとも幾つかの色々の場合に、商業的社會が非常に熱心に希望してゐた政治的變化を促進するに役立つた』(一四七頁)。

茲で著者はミッシェンの勢力に對して注意を拂ふ。(一四七頁以下)『ミッシェンと商業』兩者共に西歐の、資本主義文明の代表者であるに拘らず、最初は相互に相手を誹謗して、自己の勢力の扶植に汲々としてゐた。しかし定住商業の行はれるに及んでは、兩者の協調が漸く目立つて來た。實にかゝる植民地に於けるミッシェンは、單に精神的宗教的な傳道許りでなく、土人を相手に交易を行へば(一四九頁)又土地經營も行つたのである(一五〇・一六九頁参照)。

かくして『ミッシェンは定着した商業勢力と力を合せて、土民的土地制度から、資本主義原則に一層一致すべき土地制度に移る可き事を論じ』(一四九頁)十九世紀後半には、『ミッシェン』と云ふ言葉は、此の社會の支配的な經濟・政治權力を意味する事になつてゐた』(一五一頁)。

植民地に於ける宗教上の布教が如何なる性質のものであるかをよく示してゐる。

定住商業の發生と共に所謂、都市の成立となる。ホノル港の發見は一七九四年とせらるゝが之れが布哇全諸島

の中心として卓越する迄には相當の期間を要した。それ迄は全諸島に多くの村落が散在しておつて、酋長が住んでおり、來訪の外國人の必要な物資を銘々に供給してゐた。一八二一年頃のホノルも此の型を出るものではなかつた。

『一八二一年頃のホノルは未だ人口三千位で一つの疎ばらな村に過ぎなかつた。しかし商業の中心地が、草葺の家で、一年に十萬弗のサンダルウッドの輸出を商賣の全部としてゐる四軒の商館の周圍に發展しつゝあつた』(一五一頁)。

一八四〇年頃迄には所謂、町と稱せらるゝ部落が幾つか集中化される様になり、ホノルが恐らく人口七千人を以つて其の首位にあつた。

斯くの如く人口の増加と共に、分業の傾向が顯著になる。一八二〇年のホノルには商館支配人や書記、傳道宣教師、醫師、宮廷への外人顧問及び祕書、船員水夫等があげられる。更に十年後には、此の外、酒商人、旅館業者、料理人、給仕、大工、指物師、鍛冶屋、石屋、洋服師、帆製造人、まいはだ師、農夫牧夫等が挙げられる。著者は特に一八四七年のホノル住民の職業を擧げてゐる(アッペンディックスC三二二頁参照)。

之れによれば、立派に一つの都會的な體裁をとゝのへてゐる。かくして一八五五年にはホノルが輸入に於いて九四%、輸出に於いて六七%の記對量を占めてゐる。併せて、ホノルが布哇全諸島に對して中心的勞力化しつゝある事情を示してゐる。

農業の外に商工業的勢力の擡頭に就いては、再び後に關聯する所がある。著者は第十一章「職業的連續」に於いて之れを繼承し、以つて布哇經濟の、植民地的偏向から經濟的文化的成熟への過程(第十二章)を示さうとしてゐる。

五

布哇が如何に經濟的文化的成熟を示して來、非農業的活動が多くなつて來たとは云ひ乍ら、其の經濟的活力の中心は依然甘蔗栽培に在る。茲に於いて著者は第八章より第十章迄をプランテーションの問題に分けてゐる。即ち第

八章は資本投下、第九章は栽培植民地の労働組織の變化について、第十章は同じく労働取締に就いて記述してゐる。布哇が世界經濟裡に於ける栽培植民地として位置してゐる事は云ふ迄も無い。此の地位が無かつたならば布哇の今日あるを考ふる事は不可能に近い。

所謂プランテーションの名に該當する栽培の開始は一八三六年カウアイ島のコロアに於いてあるとされる(一五九頁)其の以前、或ひは其の後に於いても布哇の農産物が外國市場に出る事があつても、それは決して本格的に栽培經營によるものではなかつた。牧畜にしても大規模の投資對象となるに至つたのは一八六〇年以降で、最近に於いて始めて投資量、經營等から見てプランテーションと同一視せらるゝ様になつて來たものである。故に一八五〇年頃までは布哇の農業的活動は決して定まつてゐなかつた。即ち其の時期の特徴としては農業資本を投じて多種多様の作物を目標としてゐた『誠に眞面目ではあつたが同時に極めて單純な希望を以つて、初期の布哇在住者は、此の島が農民國として、各人が自分の葡萄樹と無花果樹の下で(無事に自分の家に)平和に暮して行く事の出来る』農民國として經濟上最大の發展をなさしめる事を夢みてゐた(一六〇頁)。故に一八五〇年に成立した布哇王立農業協會もあらゆる方面に於ける農業の利益を進捗する事が目的であり、土地に適すと思はれる各種の作物の耕作が擧げられてゐた。

しかし一八五〇年頃、此の種の農業に對して恐慌が起つた。之れはカリフォルニアの金鑛のゴールドラッシュ及び其の消滅に基くものであつて、その後漸く農業投資も特殊部門に向くに至つた(一六一頁)。それには土地制度の改革が當然伴はねばならなかつた。一八四八年のグレート・マヘレがそれである(土地の私有化に就いては第三章參照)しかし其の後にしても、甘蔗栽培はなほ頗る投機的であつた。著者は、『資本制の發展は、市場が確立する以前には行はれない』と云ふ命題を引用して、布哇栽培の不安定な情況を、外國市場の布哇に對する需要の不安定に歸してゐる(一六三頁以下)。此の意味で十九世紀後半に漸く市場を擴大しつゝあつた布哇砂糖は、一八七六年米國との關稅協定となり、之れが栽培に及ぼした好影響については、その後五年間に砂糖輸出が四倍になつた事によつて立證される(一六五頁)。是等の投資は勿論外資によるものであつたが、その額は二十世紀になつての布哇砂糖栽培への投資は、八千五百萬弗とされてゐるが、其の以後は外部よりの投資が僅少であるから、一九二九年栽培業者によつて其の持株價を推計した結果の、一億五千萬弗より一億七千萬弗への増加は主として當業者の餘剩蓄積の再投資と解せられる(一六六頁)。これ又布哇の經濟的成熟を物語る一面である。併せて今日の栽培經營が金融的支配を受けてゐる事も布哇經濟の生長を示すものであらう(一七八頁「The Factors and Plantation」參照)。

以上はプランテーションの資本關係であるが、他の一面は労働關係である。布哇の労働史は一つの世界的な移民史である。開發すべき有望な資源があつて、しかし土著の労働力が不足してゐる場合、頼る可き方法は労働力の大規模の輸入である。これが布哇植民史の根幹である。開放資源期に於ける労働の不足に對して奴隸的な強制労働、移入労働の歓迎がその特色となる。農場に於ける苛酷な取締、殊に逃亡に對する極度の警戒等はいづれも、此の時期の特長である。しかし、労働力が充實し、更に、移民の二世労働力の出現するに及んでは、又開發が現に漸く限界に達するに及んでは、開放資源期から閉鎖資源期に入る。茲では、労働の移入は最早必要が無くなる。従つて移民の門戸は直に閉される。併せて労働強制的必要が無くなつて、自由労働へと移る。茲に土地資源と労働との均衡が生れて、プランテーション以前の均衡時代からの一循環が完成する(第九章)本章は、栽培植民地の労働力問題・其の對策並びに其の推移に就いては、多大の指示を與へる。『プランテーションと労働の支配』(第十章)は栽培労働

者の所謂労働者問題を主題とする。労働者の訓練・待遇及び精神的傾向並びに労働の不平・反抗・争議などが問題となる。此の章の指示するところは外地經營に於ける人的問題に關するものであつて、異人種の接觸は可なり面倒な問題を惹き起こすこと云ふ迄もない事である。

著者は是等の點に就いては労働の支配が慈悲的農場制から法律的规定への推移を認め(二二六頁)更に布哇經濟の發展・非農的・商業的勢力の擡頭による労働關係法規の整備をよく指摘してゐる(二二〇頁)。「膨脹する栽培人口の國家統制を歓迎する輿論的感情は十九世紀後期の非栽培的・商業的中心の勃興と共に益々大聲となり效果的になつて來た。栽培事業に關する、殊に其の労働についての制限的法律の一體は五惠條約締結以來著しく増加した(中略)。それ以來の、主としてホノルル及び其の他の源から發した立法は益々労働者の爲めの完全なる保護、労働者に關する法律の更に温情的な管理等に向つてゐた」しかし其の反面、栽培現地以外に支配的本部を以つた金融的支配の壓力を決して輕くなかつたと見る事が出来る。之れは「プランテーション」の精神的方面に見る事が出来る現象で、現場に於ける人的融合を描き乍ら(二三七頁)著者は「プランテーション」の基本的構成の一部は、勿論、かくの如き精神的要請の樹立を、よし全然妨げぬにしても少くとも獎勵しない様に計畫されてゐる」からして、茲に二つの傾向の生ずる事に留意してゐる。「二つの傾向の間に起る鬭争、即ち人種的職業的差別に立つ嚴正な階層を更に強化し様とする傾向と、プランテーション制内に於ける動きや接觸にもつと大きな自由を與へようとする傾向との争は、布哇社會史の最も興味あり意義ある一面である」(二三七頁)。茲で經營者が農場とホノルル商館との間に立つて板挟みになる事がある。農場の支配人側では労働者の爲めに農場訓練の緩和を主張する。商館側では「プランテーション」のビジネスは、どこまでも之れで押さねばならぬ、道徳とか不道徳とかの問題ぢやない」と主張する。此の相違

は農場地付きの經營者の場合と會社經營の場合との相違でもある(二三九頁)。

要するに此の二つの點、即ち現地的なものと現地的ならざるもの、營業者であるものと營業者ならざるもの(前述のホノルルを中心とした非農業者)の立場の相違が労働者に對する態度に之れ丈の相違を生ぜしむるのである。

六

布哇經濟の發展は前述した様に人口の職業構成の上にも現はれる。職業構成は併せて身分的構成をも意味する。一八八四年の布哇に七割餘を占めた不熟練労働者は一九三〇年には五割五分の比率に減少する、自由業及び熟練労働者、家事使用人の率に増加がある(二四七—八頁)。是等の職業及び身分的構成を人種的に見ると、彼等の經濟的立場の過程が明かになる。移民は勿論、初期には經濟的身分的に最低位にある。しかし「本國の舊套より解放され、新しい土地では貨幣的に計量される經濟的成功を唯一の基礎にして自由に身分の昇降を競ふ事が出来る」此の場合、各人種によつて職業的相違が發生して來る事、例へば希臘人の料理店、瑞典人の建築家、愛蘭人の警官、支那人の商人等は、既に著名な型である。著者はプランテーション、小賣商業、自由業に於ける各移民人種別の就業率を細かに算出し、又其の所得や銀行預金、資産状態を調査して、是等の人口の經濟的・職業的乃至は身分的構成の状況を説明してゐる。一般的結論としては、僅か乍らにしても、移住年限の長きに從つて、プランテーション内に於ける地位の向上、他職業への進出等の比率が増加してゐる事實が認められる。例へば日本人の場合に就いて見ると、日本人の砂糖栽培業に於ける就業率は一八九〇年の二〇〇(指數)から一九三〇年の六五に低落してゐる。同じく農場監督に職を持つ者の指數は一九〇二年の二一・六から一九三〇年の一一・四に及ぶ。其の平均月收入は、三一・五二弗から一九一五年の三六・六〇弗に増加する。日本人小賣業者の指數は、一八九〇年の八から一九三〇年の一八

○に及ぶ。自由業者は同じ年代については一から八〇にまで比率の増加を示してゐる。又銀行預金では、一九一〇年一人當り二・四〇弗から一九三四年の五四・五七弗に増加し、不動産資金は一九一一年二・六一弗から一九三〇年の九二・三二弗に増大してゐる。外の移民に就いても同じ様な事が云へる。従つてそれだけ移民成功者の存在が物語られる譯である(二五〇—二六八頁)。

此の職業上の變化及び進出に就いて人種的偏見が如何に作用するか、新しい移民が入つて來ると當然、從來の均衡に少なからぬ變化が生ずる譯である。

「占める可き場所に対する競争は、經濟的に水準の低い場合には主として特に人別のと云ふ程ではない。しかし闘争の舞臺が上部に動いて來ると、之れが非常に意識されて來る。移民と在住者の間の寛恕・無關心の態度が失はれて公然の敵視と猜疑とへ移る。人種的偏見は、既得利権が脅かされる事重大になると、常に防衛機構として現はれて來る。人種的種姓制度、階級的障害は、此の闘争を解決するに一時的効果を持つ。人種間の親密な接觸が生じ、學校、街頭、事務所等に於ける共同の經驗、共同の傳統及び傳習の發生等が結局、同化融合を招來する事となり、——人種的關係の循環に於ける最後の段階に達するに至る(二六八頁)。此の所、著者の見解は相當樂觀的と云つて差支ない。「頂點を希望する者の全部に充分の餘地が存在すれば、此の偏見の防衛的手段は、又、それ程歴然たるを要さぬかも知れない。布哇に於ける人種的感情の表現が比較的些細であると云ふ事は、疑もなく、引きつゞいて職業上の機會が充分にあつたと云ふ事によるものが多い(二六九頁)。故に一九七〇年頃支那人が又、一九九〇年日本人が問題視されて來たのはいづれも職業的進出に基くものであつた(二七〇頁以下)。著者の結論は『全體として布哇は他の植民地に普通見出さるゝ様な峻嚴な人種的差別の諸形式から著しく逃れてゐる』と云ふ事である(二

七三頁)。

かうした布哇が文明的成熟に近づいて來た事は想像に難くない。「布哇の開拓期は終つた。人口増加や土地利用、資本労働投下の擴大の頂點は過ぎた様に見える、布哇群島は、一つの安定期に入りつゝある、故に残存の資源及び機會の領域は慎重な計畫に基いて發展せしめらる可きであらう。本島の資源の開発については前よりも一層の徐々の、しかし一段と健實な開發が將來に豫期されよう。公私の機關が本島の生活が課する不可避の諸費用とあはせて諸制限に就いて痛切に氣がついて來た、故に新しい生活の綱領と計畫とを作成し、之れに照らして事物の相對的價値を發見しようとする爲めに眞摯な努力が行はれつゝある(二七五頁)。

かゝる情勢の下に社會の内的安定と自給的經濟の確立に向つて益々注意が拂はれる。従つて布哇の文明的成熟に連れて、此の安定化及び所謂文化費の問題が生じて來る。第十二章は之れに應へる。

布哇の經濟開發が一應發展段階を一循した事は既に述べた。しかし布哇經濟は、世界經濟に依存するからして、國際經濟の情況が最も痛切な影響を與へる。殊に米國合衆國の關稅政策が重大な關心を持つ。従つて其の變實によつて『現關稅の下に約千九百萬弗が年々減額されて、之れが布哇糖業に及ぼす損失は、土地利用、雇傭、租稅、その他此の島の全經濟・社會的構造中の他の要素に深甚の結果を及ぼすであらう』(二七七頁)。かゝる關係裡にあつて、布哇では土地、労働、資本いづれも既に或る限界に達した。土地は限界耕地に收穫遞減をみ、海外資本及び労働の流入は今や逆傾向に轉じて來た(二七八—二八〇頁)。かくて資本と労働の輸出が緊要事となる(二八一—二八四頁)。

之れに對應して、一般的に布哇の文化費は頗る負擔的になつて來る。著者によれば邊疆社會では、費用を顧慮す

る事なしに新秩序の建設に熱中するが故に「氣前のよい款待、寛大」を以つて知らるゝが普通である。布哇に於いても此の例に漏れず公共福祉事業や個人的慈善に頗る放漫である。かくて幼児死亡率は減少する、教育は普及する。しかし反面、其の負擔は決して輕微ではなかつた。殊に公立教育機關が徒らに高尚な人間を造り出して、卑賤な勞務に従ふを忌避せしむる弊を指摘してかゝる教育の精神的費用の方面を衝くものさへある(二八八頁)。

しかし此の方面での問題は、著者の指摘してゐる通り、相當高度の教育を受けた二世達が實社會に於いて職業及び地位を競ふ時になると、法律的ではないが暗黙的な人種障壁に隔てられてゐる事を發見し、其處に幻惑と厭嫌の感情を懷くに至る過程である。『布哇生れの青年は屢々學窓から實社會に出るに際して、彼等に對する態度に顯然たる變化の生ずるを経験してゐる。己の野心、近親朋友の期待が萬が一にも實現され得さうもない事に氣がついて、彼等は、無駄な希望を懷かせた社會制度の價値を疑ふ。極端なる場合には、個人は自己への自信と、彼等をつゝむ社會秩序への自信との喪失を感じる』(二八九—九〇頁)。

かう云ふ事態に於いては、當然、先進諸國の場合と同じく、社會經濟的計畫の必要が痛感されて來る。著者も此の項を正しく挿入してゐる(二九三—五頁)。

七

最後の章は布哇のアイランド・コミュニティ社會の記述である。以上に述べた如く發展して來た此の地方が果して、凡べての人々が参加する共同の文化を持つたコミュニティ社會であるか否かを検討する必要がある。どの程度まで色々の移民が一體化したか、どの程度まで未だ差別的な特徴が「資本主義文明の標準的的影響」に抗して残つてゐるか。其の爲めにホノルルを中心とする中心都市と其の地方との體制が取り上げられてゐる(二九八頁以下)。即ちホノルルの首

都化、之れを中心にして交通運輸の改良、新聞、通用語等が記述される。『ホノルルに發する正規の公共教育の壯大なプログラムは、島の青年の間に傳統と理解の共同體を作成する事を目標にしてゐる。…方法及び内容を完全に標準化する事を固守しないが、布哇の公共教育の中央化した制度の効果は、其の監督の下に來た凡べての者に共通の型を與へて來てゐる』(三〇三頁)。従つて『はじめにはアメリカの傳統と共鳴する事最も少いと考へられてゐた文化を持つた移民集團がアメリカ的教育の機會を最も熱心に受け入れてゐる、と云ふ事は注意に値する。』従つて又、本國側から見れば所謂二世問題が難題となる譯である。日本人、支那人は頑固に子供達に母國文化の傳統を植えつけようとする。『然かしそれ等の爲めの制度の影響も第一世の過ぎて了ふと共に衰滅する傾向がある』(三〇四頁)。此の點で著者は依然、樂觀的であると云つて差支あるまい。次いで、社會生態學の一命題である、離婚及び孤立の社會的過程、その地理的表現を研究する。『文化的障壁の最後の解消、同化作用の最上の指針は人種的融合である』此の點では布哇は「太平洋に於ける人種の坩堝」と云はれてゐるが、混合結婚の集積の結果は、『布哇に特殊の地方型——即ち新しい人種を造り出す様に見える』(三〇五頁)。

人種集團の地域的隔離も、社會的融合の程度を示すものであるが、茲でも結論は融合作用の方へ有利である。日本人・支那人・土人・フィリッピン人・ポルトガル人等の最も集結した地域が無いが、ホノルルの如きをとつてみれば『是等の人種別コロニーの數及び特殊性は漸次減少しつゝある。二十世紀の初め、ホノルルの國勢調査列舉地區總數中、五分の一はその性質がコスモポリタン、即ち全人口中、一人種集團の占める比率が四〇%以下であつた。一九二〇年にはそれが三分の一、一九三〇年には半數以上が人種的に混合して了つてゐる』(三一〇—一頁)。斯くて布哇地方内に於ける社會的過程の總決算は、此の地方的背景に適應した生活の統合的組織が徐々ではある

が、間違なく成立しつゝあると云ふ結論に到達する。今なほ幾多の特殊性差別感が存在するが、其等は漸次解消しつゝあるので、独自の土着文化を生むであらうと云ふのが此の書の結論である。

結 語

扱、以上聊か紹介が長きに失した。茲で結論として簡単に批評をのべたい。

本書のテーマは、土地と人間の關係であるが、此の人間の社會は大きな世界との關係に於いて此の土地に結びついて來てゐる。其處で、此の發展史の内布哇の土地と人間社會との關係の推移に一つの循環を見ようとするのが著者の課題である(パーク教授の緒言参照)。此の事は著者が閉鎖資源期—開放資源期—閉鎖資源期の一循環に、相當效果的に示してゐると云へる。此の三期について、それらの生態即ち土地と人との關係、社會的體制及び機構、生活型及び生活理想が附隨した事は本文中に紹介した通りである。此の意味で本書は立派に其の副題、即ち布哇に於ける生態的連續を説明し盡したと云つて差支へない。

唯、之れは布哇の資料によつて生態學の學理を確證すると云ふよりも、生態學理論を型として布哇の生活事象を整頓したと云ふ方が適當である。此の兩者は區別されねばならぬ。こゝでは生態理論の研究でなくて、生態理論の應用である。生態理論に批判的態度を持つ者は此の書によつて得る所は無であらう。又、本書が爲めに資料の取舍に於いて偏重なきや否やを疑ふかも知れない。遺憾乍ら筆者としては、其の點迄充分に穿鑿する能力を持たぬ。本書丈けについて見れば、生態理論の應用としては十二分に成功してゐると云つて差支あるまい。

本書の特質は、又別の方面から見ることが出来る。布哇の事に關して、専門の研究なり調査なりは頗る多いであらう。其の地理なり産業なり、労働なり、移民なりについて、各々もつと精密な研究があるであらう。其の點につい

ては本書は決して一問題に對して悉く盡してゐるとは云へまい。しかし基くところが生態理論なりにせよ、全體的に纏めて布哇を取扱つた上に於いて、一つの研究方向を示してゐる。移民史又は労働事情等を研究するものもあらう。栽培農場を經營學にみる者もあらう。しかし、凡べてを何等かの觀點から綜合して見る事も當然、許されねばならぬ。否、むしろ其の方により、重要さがあるとも云へる。本書は正さに此の種類のものである。外地經營は、植民政策、農政學、經營學の問題であるかも知れない。しかし、本書に示された方向に於いて、社會學者が(人種學土俗學的にでなく)外地經營の問題に参加する資格あるを示してゐる。之れは本書の一つの業績と云つて差支あるまい。

かゝる意味で、本書を紹介する所以である。又本書に多分に産業・經濟的な記述を豊富に盛つてゐる。社會學者のみならず、經濟地理、植民政策、拓植方面の關係にも一讀を薦める所以である。(The University of Chicago Press. pp. I-XXII, 1-337. 1938. 丸善賣價十一圓四十錢)。(昭和十四年一月)